退職者のひとこと

退職挨拶

考古学や埋蔵文化財保護に携わる職務に35年間就いて定年を迎えた。大学の考古学研究室の助手、宮城県立東北歴史資料館の考古研究科、文化庁で埋蔵文化財担当の調査官、奈文研の部長職を勤めてきた。子供のころ、郷里の裏山で土器や石器を拾っていた私が、職業として考古学研究や遺跡の保護行政に専心してこられたのは、大変に幸せであった。

捏造された遺跡で30年近くも騙されてしまい、多くの方々に大変なご迷惑を掛けてしまったが、日本

左から、高瀬文化遺産部長、巽副所長、岡村企画調整部長、光谷年代学研究室長、安田埋蔵文化財センター長

列島人の起源、縄文時代の貝塚などの研究に直接携われ、ロシア沿海州の貝塚発掘や中国内モンゴルの初期新石器時代遺跡の発掘調査にも参加できた。文化庁に移ってからは、多くの遺跡の保存や保護行政のシステムや標準作成、『発掘された日本列島展』、「阪神淡路大震災に伴う復興・復旧事業に伴う発掘調査」支援などを、手がけることができた。研究的には主に縄文時代の遺跡や文化を総合的に捉えて復元し、成果を広く普及し、文化財についての理解を深めるなどのパブリック化に努めてきた。このような仕事の延長で、文化財保護に資するために平成14年から奈文研にお世話になることができた。

奈文研では、『曙光の時代　―日本考古学の連続と変革―』展をドイツで開催し、奈良博で帰国展もおこなえた。キトラ・高松塚古墳の保護などについて文化庁や自治体、マスコミなどとの対外的な調整、所内の連絡調整をおこない、自己点検委員会の担当ともなった。また平城宮跡については、最も不案内な私が、平城宮跡発掘調査部長となり、大極殿の復原研究の連絡調整も担当させていただいた。どの職務についても十分な役を果たすことができず、申し訳なく、心残りである。

日本の考古学、埋蔵文化財など保護行政上での研究的リーダーとして活躍し、私が研究を志した時から憧れであった奈文研で、曲がりなりにも6年間仕事させていただいた。その間大変勉強になったし、純粋な研究もすることができた。ありがとうございました。今後とも奈文研が、日本の文化財研究のリーダーとして、国際的にもますます活躍されることを期待したい。　　（企画調整部長　岡村 道雄）